



Emergency Watch

No.70 Oct. 2016

神戸こども初期急病センター

2016年9月受診者数

1824人



【疾患頻度】

1. 急性上気道炎	: 323人
2. 感染性胃腸炎	: 205人
3. 咽頭炎	: 175人
4. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 139人
5. 気管支炎	: 102人



厳しい残暑もようやく落ち着き、涼しい日が増えてきました。ここ数か月は特に目立った感染症の流行などはなく、神戸こども初期急病センターの受診者数も落ち着いています。

さて、本日はこれから冬にかけて流行してくることが予想されるRSウイルス感染症について紹介したいと思います。

➤ どのような病気か

「RSウイルス」というウイルスが気道（空気の通り道）に感染することによって引き起こされる病気です。どこまで感染が及ぶかによって上気道炎から細気管支炎や肺炎まで幅広い症状を呈する可能性があります。乳児の半数以上が1歳までにRSウイルスに感染し、2歳までにはほぼ100%が感染を受け、その後一生の間再感染を繰り返す可能性があります。

症状としては、大多数の人で軽度の鼻汁や鼻詰まりが出現し、数日かけて徐々に咳嗽や喘鳴（ぜいぜい）が出現してくることもあります。一般的に生後半年未満では咳嗽や喘鳴などの呼吸器症状が強く出やすく、気管支喘息に罹患した際に似た呼吸困難などが生じる場合があります。逆に1歳以降、年長になってくるとごく軽度の感冒様症状しか呈さない場合が多くなります。成人で感染した場合には熱も出ない場合がほとんどです。

➤ どのように感染するか

すでに感染している子どもの咳やくしゃみの中にウイルスが排泄され、飛沫（しぶき）の吸入や食器・コップなどを共用することによって伝染していきます。また、潜伏期間は2-8日間と短く、低年齢児の集まる集団保育の場などで流行しやすい感染症です。

➤ 検査、治療法について

通っている集団保育の場でRSウイルスの流行があり、鼻汁や咳嗽といった気道症状と発熱を呈した場合にはRSウイルス感染症が強く疑われるため、必ずしも診断の為に検査が必要になる訳ではありません。現在は鼻汁を使った迅速検査キットが存在するため、30分程でRSウイルス感染の有無を調べることが可能になっていますが、検査の適応となるのは比較的症状が強く出やすい「1歳未満の乳児」や症状が重症であり「入院が必要と判断される児」のみとなっています。

また、RSウイルスには特別な治療法はなく、発熱時や鼻汁・咳嗽などに対する対症療法が中心となります。そのため、流行期にはマスクの着用やしつかりと手を洗う等の予防策を取る事をお勧めします。



発行：神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門